令和２年度三田市高校生議会　質問・答弁内容

議員名（高校）	質問テーマ・内容	答弁内容
①坂中　智喜（ひまわり）	**【人と触れ合える社会について】** 私は、卒業後も自分のキャリアアップのために、たくさんの人と出会い、交流したいと思っています。現在、新型コロナウイルス拡大により、新しい生活スタイルの中、人と人とが距離を求められています。しかし、人と距離を取って生活することはできても、私たちひまわり特別支援学校の児童生徒が、学んでいくためには、実際にその場所に行き、実物に触れることが必要です。その為、今回もリモートではなく、議場で議会を体験させて頂いています。ご配慮いただきありがとうございます。 私は学校で、今自分にできる事を「いつでも・どこでも・だれとでも」発揮できるように勉強を頑張っています。ここで、ひまわり特別支援学校高等部の学習の様子をご覧いただきます。（写真1）「毎日のからだの学習では、それぞれの課題に向き合いながら、先生と一緒にからだのコントロールに取り組んでいます。私はリラックスして様々な姿勢を保持する学習をしています。」（写真2）「個別学習では卒業後の生活や余暇活動につながる学習をメインに頑張っています。一番左の写真で、私は視線入力装置を使い、パソコンを目で動かしてゲームを楽しんでいます。」（写真3）「集団学習では、高等部 3 人で自然や運動、芸術に触れながら、人との関わりを学び、楽しく活動しています。友だちの活動を見て、応援して一緒に盛り上がる、とても楽しい時間です。」まだまだ初めての人や場所に緊張してしまいますが、卒業後に、たくさんの人と一緒に生活・体験ができるように準備しています。 私たちにとっての「人と人とが触れ合える社会の実現」のためには、障がいのある人や支援する人たちが、安心して集まれる場所がもっとたくさん必要です。そして、その場所に対する周囲の理解と協力ももっと必要になると思います。また、一緒に出掛けるグループや一緒に学べる仲間が気軽に集まれる仕組みがあって、自分の好きな新喜劇や漫才の舞台を見たり、美味しいご飯を食べたり、障がいがあっても参加しやすいイベントやツアーを開催してもらえると嬉しいです。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	坂中議員が、ひまわり特別支援学校で日々積極的に学んでおられること、うれしく思います。 人と人は、様々な出会いや交流の中でお互いを知り、深め合うことで互いの信頼関係が築かれていきます。しかしながら、ウィズコロナの社会の中、私たちには新しい生活様式を意識した暮らしが求められるようになりました。 こうした中で、日頃のあいさつや住民間のコミュニケーションがマスク越しとなるため表情が分かりにくく、特に聴覚障害のある方には口元が見えないことで会話がしづらいといった声もお聞きします。人が集まることが難しくなり、オンラインによるつながりが進みつつありますが、議員、お望みのように安心して実際にその場所に行き、実物に触れることができる暮らしを少しでも早く取り戻せるよう、私も全力で取り組んでまいります。 議員ご提案の人と人とが触れ合える社会を実現するには、障害者理解を促進することが大切であり、その手法としては身近な地域で日常的に障害者と関わりをもつことができる「居場所」や「社会参加」の場や機会をつくっていかなければなりません。 三田市では、「三田市みんなの手話言語条例」や「三田市障害者共生条例」を策定し、より積極的に事業を推進する基盤を整備してまいりました。さらには、行政に求められる取り組みを具体的に検討し、障害のある人もない人も「共に生き、互いを尊重し、応援し合える社会」を目指すことを目的とした「共生社会推進プログラム」を策定するなど、障害のある人とない人の相互理解の促進に取り組んでいるところです。 具体的には、市内小中学校における福祉学習の推進や地域においては、障害のある人がイベントやコミュニティカフェに参加しやすい環境づくりを推進するなど、障害のある人とふれあい知り合う場をつくる取り組みが進められていますので、議員におかれましても積極的に参加いただきたいと思います。 このように、お互いを尊重し、多様性を認め合い、人と人とが共に支え合い生きていく共生社会の考えによる取り組みは、議員が求めておられる一緒に出かけるグループや一緒に学べる仲間が気軽に集まれる仕組み作りにつながるものと考えます。私としましても、誰もが自分らしく活き活きと暮らすことができるまちづくりを市民の皆さんと一緒に目指してまいりますので、ご理解いただきますよう願いいたします。

②佐藤　凌（三田西陵）	**【三田の魅力発信について】** 現在、新型コロナウイルスの感染拡大で様々な不安から全国的に出生率が一段と減る傾向にあります。三田市も例外ではなく、これまで問題としてきた人口減少にさらに拍車はかかるのではないかと思います。将来的に人口増加へと繋げるためにも、三田市の良さをこれまで以上に発信する必要があると感じています。 そこで私は、SNS のさらなる有効活用による三田市の魅力発信に着目しました。既存のインスタグラムやフェイスブックの公式アカウントを広報していくだけでなく、新たな SNS も駆使することで、全国の幅広い年齢層に三田市の「食、遊、住」などの魅力を広げていけると考えています。現在、家で過ごす時間が従来よりも長くなっており、「密」を避けるために、これまでと違った場所や空間で余暇を過ごすなど、外食や遊び、旅行などにも変化が見られます。新しい生活様式が求められる今、季節ごとの行事、豊かな自然環境、そして立地の良さを併せ持つ三田市にとって大きなチャンスだと考えます。 魅力発信に向けて、SNS を通して 1 人でも多くの人に「三田に行きたい、三田に住みたい」と思ってもらうには、公式アカウントの存在を知ってもらうだけでなく、フォローしたいと思えるような投稿写真、文面などが必要だと思います。そこで、近隣の約 1.4 万人のフォロワーを持つ神戸市の公式インスタグラムからヒントを得ようとインスタグラムの投稿写真と比較してみました。三田市は山や花などの自然風景が中心であるのに対し、神戸市は自然風景に加えて夜景イベントに参加している人々の写真も多くみられます。三田市では、現在、ハッシュタグをつけて投稿してもらうことによる広報写真の募集をされていますが、「三田市の「ならでは」」を知ってもらえる写真募集をより幅広く行うことが必要だと考えます。また、ツイッターや LINE などで新しくアカウントを開設し、そこでイベント告知、お得な情報発信、少しコストがかかるもののクーポンの配布等を行っていくのはいかがでしょうか。和歌山県橋本市では LINE を使用してプレゼント企画を行っています。若者を中心とした市民の発信力は三田市の魅力発信において非常に重要だと考えます。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	今般の新型コロナウイルス感染症の影響により、「新しい生活様式」や「価値観の変化」が生まれました。議員ご指摘のとおり、季節ごとの行事、豊かな自然環境、そして立地の良さといった強みを持つ本市にとって大きなチャンスであると捉えています。京阪神からのアクセスが良い本市では、リモートワークやワーケーションといった新しい働き方を実践しながら、三田の多様な魅力を楽しみながら、自分らしい生き方を求めることが出来ると考えています。里山の自然体験、アウトドアや田舎暮らし体験など、今多くの人が求めている「安全・安心」な体験が楽しめることは、本市の大きな強みです。 「人口減少にも負けないまち」であり続けることを目指す本市では、こうした三田の観光資源の持つ強みを生かして人を呼び込み、交流人口を増やすこと、三田で食し、遊び、伝統芸能や歴史も含めた三田の魅力を体験していただくことは非常に重要です。三田に何度も訪れ、地域との交流が増えることは、ひいては三田に暮らすことにもつながっていきます。 そのために三田の魅力を発信すること、特にSNSによる発信は効果的な手段であると考えております。 本市では、現在公式のフェイスブックとインスタグラムを運用しております。公式フェイスブックは、イベントや市の取組みの情報をピックアップしてタイムリーに発信する広報手段として活用しています。 公式インスタグラムは、三田への移住をサポートする「さんだ住まいるチーム」メンバーの発案により、平成 30 年 10 月から運用を開始しました。三田に住む人、三田を訪れた人が自ら感じた「リアルな三田のいいところ」を発信しています。 これまでにも、「さんだの春夏秋冬」や「グルメ」などをテーマに投稿を募集、キャンペーン特典として、プレゼント企画等も実施してきました。自ら発信するという開設当初のコンセプトを大切にするため、みんなが発見した三田の魅力を広く発信できるよう、公式アカウントでは投稿写真のリポストを重視した取り組みを行ってきました。 一方、神戸市の公式インスタグラムは 20 代の女性をターゲットとして、特に神戸市内のかわいい、おしゃれな瞬間や風景を発信するツールとして、SNSやwebの活用を専門とした企業の協力のもと運営されており、多くのフォロワーを獲得されています。 先にご説明したとおり、本市の公式インスタグラムは市民一人ひとりが自ら感じた三田の魅力を発信することにポイントを置いており、神戸市の方向性とは異なりますが、「三田ならではの魅力」を知ってもらうことが重要であることは言うまでもありません。現在、「リアルな三田のいいところ」の発信を主として、他にも旬な情報やイベントの告知や紹介などにも力をいれています。 今後も、若い世代が思わず投稿したくなるような幅広いテーマでキャンペーンを行うなど、市内外に三田の魅力を広く発信していけるよう取り組んでまいります。議員はじめ若い世代の皆さんにとって、インスタグラムが単なる情報収集のツールであるだけではなく、自らが発信者になって三田の良さを紹介したいと思っていただけるような仕組みづくりが必要だと考えております。今後もいろいろなご提案を頂戴し、是非積極的に三田の魅力発信に一緒に取り組んでいければと思いますのでよろしくお願いします。 なお、議員ご提案のツイッターやLINEについてですが、例えばLINEは若者にとどまらず、多くの世代に利用されているSNSであり、有効な情報発信ツールです。今後こういったSNSの積極的な導入に向けても検討を開始しておりますのでご理解ください。

③安永　泰成(北摂三田)	**【市民の市政関心向上について】** 私は、学校の授業で若者の投票率の低下を学びました。そして、その頃に三田市議会議員選挙があり、私の恩師の母親が立候補していたなど、市政について興味が出ました。 そこで、三田市議会議員選挙の投票率を調べてみると、前回と前々回の投票率が 50%を下回っており、今回も 50%程度ということを知り、これでは民意を反映できていないのではないかと思いました。また、資料にある通り、今年の選挙では 20 代は約 30%、10 代、30 代は約 40%とかなり低い投票率になっています。これらの数値からも、若者の選挙離れについて考えなければならないと私は考えました。 これらの問題を解決するためには、市民が市政について考える機会が必要であると思います。そこで、現在、三田市で実施しているさんだ未来トークの若者バージョンとして、市議会議員と高校生などの若者がオンラインでこれからの三田について語り合うような場をつくるのはどうかと考えました。コロナの終息の兆しが見えない中、家で市政について話し合うことができれば、市政に興味のある方はもちろんのこと、あまり興味のない若者や、病気や怪我でその場へと行くことのできない方も参加しやすいと思ったからです。また、今回の高校生議会のように事前準備を行い、パワーポイント等のデータを活用することで、市議会議員とのより深い交流や議論ができるのではないでしょうか。そうすることで、市議会の役割や市議会議員の仕事なども学びながら、市政に関心を持つ若者が増えるのではないかと思います。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	安永さんのご質問にありましたように、若年層の投票率は低い状況で、昨年の 10 月 4 日に行われた三田市議会議員選挙でも、10 代 40.97%、20 代 31.65%、30 代 40.90%という結果でした。 しかし、若者がまったく市政や政治に関心がないわけではありません。先ほど申し上げた昨年 10 月の三田市議会議員選挙では、三田市在住の大学生、米田由実さんが「VOTE FOR SANDA(ヴォートフォーサンダ)」という選挙啓発活動を実施されました。この中で、市議会議員を選ぶ意味や市政のしくみ、三田の地域課題、投票の方法などをわかりやすくパンフレットにまとめて学校を通じて高校 3 年生に配布したり、SNS で啓発したりするなど大変活発に取組みをされました。こうした活動の効果もあってか、10 代の投票率は平成 28 年 9 月に行われた前回の三田市議会議員選挙の投票率 33.21%に比べて約 7%も上昇しており、10 代の若者の三田市政に対する関心が高まったと思います。 私は、このような若者が自分ごととして、市政について考え、行動することが未来の活力ある三田を作り上げるうえで大変重要なことだと考えています。安永さんのご提案についても、同様に若者と市政をつなぐ取組みとして、大変有益な取組みだと思います。 三田市議会が行っている市民と市議会議員が地域課題を話し合う取組み「さんだ未来トーク」は、現在、市内在住・在学の高校生以上の 5 人以上のグループであれば実施可能となっておりますので、ぜひ、安永さんもグループで応募し市議会議員と市政について意見交換し、理解を深めていただきたいと思います。また、ご提案にあったオンライン会議の形式であれば、外出しにくい方でも参加できますし、資料の共有もできるため、「さんだ未来トーク」のオンライン開催についても委員会室のネット環境の整備を含め三田市議会に提案していきたいと思います。 また、今年は兵庫県知事選挙さらには衆議院議員総選挙が予定されていますので、これらの選挙を通じて市政と関わりの深い県政や国政にも関心を持っていただきたいと願っています。 なお、市においても、若者が社会や地域の課題に触れ、そうした課題を自分ごととして捉え、自分自身の「生き方」や「まち・地域を良くするアイデア」について考える企画を来年度も行ってまいります。そのアイデアを生活や地域活動などに生かす若者が増えることを通じて、人口減少の社会情勢下でも「人口減少に負けないまち」として若者が活発に活躍するまち三田、持続可能なまち三田につなげたいと考えています。 安永さんをはじめとした若者の積極的な市政やまちづくりへの参加を期待しています。

④西本　創亮(有馬)	**【自転車を活用した安全で楽しめる街づくりについて】** 現在、私は、自転車を使い登下校しています。最近では、新型コロナウイルスによる自粛期間の運動不足解消に自転車での外出やサイクリングも流行ってきています。自転車は環境にやさしい移動手段の1つでもあるので、利用を促進すべきだと思います。しかし、その反面、自転車に乗る際のルールを十分に理解していない人も見られます。具体的には、左側通行を守れていない人や、ライトを点灯していない人、自転車用レーンの活用をしていない人などがいます。それは、そのルール自体を知らないという場合もあるのではないかと思います。 三田市では、平成 29 年に「三田市自転車ネットワーク」を策定し、自転車走行空間の確保等や自転車利用環境の改善に取り組まれていますが、交通ルールの周知啓発等について、さらなる取り組みを進める必要があると思います。交通ルールの中には、よく知られていないものや、間違った解釈をされているものもあるでしょう。傘差し運転や無点灯運転など、大きな事故につながる行為もあります。 この対策として、私は、もっと多くの人に交通ルールについて呼びかける必要があると思います。より効果的な講習会の開催や、自転車の正しい乗り方の記載した看板の設置など、交通ルールを広く市民に周知すべきだと思います。自転車の正しい乗り方を覚えることで、事故の防止ができ、より多くの人が安全に自転車を利用できます。事故を減らすことは、医療現場の負担軽減にもつながります。また、「正しい自転車の使い方」や「おすすめのサイクリングコース」などを記載した看板などを設置すれば、自転車の利用が増え、より多くの人が心地よく楽しく、安全に過ごせる街づくりにつながるのではないかと思います。サイクリングをする上では、道路の両端に青いラインを入れたり、目的地までの距離を記載すれば、サイクリングをより楽しんでもらえると思います。コロナウイルスによる運動不足や、地球温暖化の進む中、自転車には大きな可能性が秘められているのではないかと思います。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	自転車は手軽に利用できる移動手段として、また議員がおっしゃるとおり、運動不足解消やサイクリングを楽しむなど多くの人が利用しています。通学に自転車を利用している学生さんもたくさんおられると思います。 令和元年、三田市内において自転車が起因する人身事故件数は50件ありました。事故件数は前の年からは減少していますが、依然として事故は発生しております。令和元年は特に若い世代の事故が 6 割近くを占めておりました。 市では、幼稚園や小・中・高等学校、高齢者などを対象とした交通安全教室を実施しており、令和元年度は78回、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で回数は減っておりますがこれまでに31回開催しています。特に小学校や中学校では、自転車の交通ルール、マナーなどを理解していただくための教室を開催し、自転車交通マナーを学んだ証として自転車運転免許証を交付しています。また、令和元年 10 月には有馬高等学校にて、スタントマンが実際に自転車に乗って交通事故を再現する「スケアード・ストレイト」という交通安全教室も開催されました。これについては議員もご記憶があろうかと思います。 例年、年4回の全国交通安全週間の期間には、高校生の皆さんにも協力していただき、三田駅前などで啓発グッズの配布など交通安全キャンペーンを実施し、自転車の安全な利用の呼び掛けも行っております。 また、自転車や歩行者が安全に利用できる環境づくりとして、自転車レーンの整備を市及び兵庫県で順次進めるとともに、自転車を利用する際のルールや、自転車保険加入につきまして、市のホームページ等で啓発周知を図っているところです。 自転車を安全に利用する上では、交通ルールを守る必要があるということは言うまでもありません。議員ご提案の「正しい自転車の使い方の看板の設置」につきましては、設置場所や自転車運転中での視認性など課題もありますことから困難であると考えておりますが、自転車の安全な利用方法について、今後も交通安全教室や様々な啓発の取組みにより、市民の皆さまが、安全で安心して暮らせるまちづくりを進めてまいります。 また、議員ご提案の「おすすめのサイクリングコース」の看板設置などによる利用促進につきましてですが、現在、兵庫県及び阪神北圏域の自治体と連携し、北摂の自然と歴史を自転車でめぐるサイクルマップを作成しています。あわせて看板の設置も検討を進めているところであり、ここ北摂を訪れる人が、自然を満喫し心地よく楽しんでいただけるよう、引き続き関係自治体と連携し、周知啓発に取り組んでまいります。

	（再質問） 「スケアード・ストレイト」に関しては、実演を取り入れたより伝わりやすいものでしたので、私も鮮明に覚えています。講習会の開催だけでなく「スケアード・ストレイト」のような実演を取り入れたイベント開催を促進すれば、それぞれの行為にどのような危険が潜んでいるか、より分かりやすく伝えることができると思います。また学校だけでなく、一般の方々も閲覧できるような交通安全教室も企画するべきだと思います。以上のような実演を取り入れた交通安全教室の現状と今後の計画について、市の考えをお聞かせください。	（再答弁） 令和２年度は、４回出向かせていただいて、街頭での交通安全に関する啓発等を三田市だけではなくて、三田警察の協力も含めて行っているところです。今後も、より多くの方に参加していただく必要があると思いますので、各学校・団体を通じて、啓発・講習会等を行って参りたいと思います。

⑤平原　新菜（三田祥雲館）	**【女性が社会進出しやすい男性の労働環境の整備について】** 私は、学校の探究活動の一環で、女性の政界進出について研究しています。女性議員の割合は、全国的に見てもかなり低く、三田市議会においても、22 名中 4 名の 18.2%と、かなり低い状況となっています。現状を表すために、政界での具体的な数値を例として取り上げましたが、政治面に留まらず、全体的に女性の社会進出が少ないのではないかと私は感じました。 女性の社会進出が少ない理由の 1 つとして考えられることは、女性は男性よりも家事・育児の負担が大きいという事です。またこの原因には、男性の家事・育児参画が進んでいないのではないかと私は思います。男女共に社会で活躍するため、また、ワーク・ライフ・バランスの実現のためにも、この現状を改善するべきだと私は考えました。 そこで、私は男性も家事・育児・介護などができるような労働環境を整えることが必要だと思いました。そうすることで、男性が家事や育児に関わる機会が増え、男女でバランスよく家庭を支える中で、女性の社会進出も促進されるのではないかと考えます。三田市では、『三田イクボス共同宣言』や、現在行われている『第 5 次三田市男女共同参画計画』の政策をさらに強力に推進してほしいと考えます。特に『三田イクボス共同宣言』については、具体的に普及・促進する政策が必要だと考えます。例えば、宣言を採択している企業の経営者や管理職の方が、採択していない企業の方と共に、取り組み事例や、事業所と社員双方にとっての利点について話し合う場を、市が主体となって設けることで積極的に推進を図っていってはどうかと思います。その結果として男性の家事・育児参画が進み、男女が仕事も家庭も平等に分担しながら、共に活躍できる地域を目指していけたらいいなと思います。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	議員がご指摘の「男女が仕事も家庭も平等に分担しながら共に活躍できる地域」のことを「男女共同参画社会」と呼んでいます。 本市では、平成13年に男女共同参画計画を策定し、その時々の現状や課題を反映させながら、現在は第5次の計画を推進しているところです。その基本目標の一つに「あらゆる分野における女性の活躍」を掲げています。そのためには、「就労の場における男女平等の推進とワーク・ライフバランスの実現」を推進し、「男性の家事・子育て・介護への参画の促進」に取り組むこととしているおとから、市長として平原議員のご指摘を大変重く受け止めております。 議員もご指摘のとおり、目標を実現するための具体的な取り組みとして、平成 30 年 11 月1日に本市をはじめ市内 13 事業者・団体で「三田イクボス共同宣言」を実施しました。 市は、宣言事業所のひとつであり同時に事務局を務めています。市といたしましては、職員のワーク・ライフバランスの実現に率先して取り組む先導的な事業所としての取り組みを進めるとともに、イクボス宣言企業がチームとなってお互いの情報交換や実践を通じて切磋琢磨していただく機会づくりにも引き続き取り組んでまいります。 あわせて実績を上げられた企業等を優良事業所として市民の皆さんに大いに PR しながら、イクボス共同宣言に賛同いただける企業をさらに増やし、将来的には市内すべての事業所が共同宣言に加わっていただくことを目標にしてまいります。 イクボスの取組みについては、男性のワークとライフに対する満足度が向上し、仕事に対するモチベーションを向上させるとの調査結果も報告されております。市といたしましては、このような効果も視野に入れながら議員がご提案の話し合う場の企画については、イクボス宣言企業の方々と相談して、今年中に1回目を実現したいと思います。また、市役所内の男女共同参画を促進することにより、イクボス及びワーク・ライフバランスの先導的役割をしっかりと果たしていきたいと思います。三田市が市民をはじめ多くの人々から高く評価されるような、「男女が仕事も家庭も平等に分担しながら共に活躍できる地域」を目指して、積極的な取り組みを進めてまいりますのでご理解をお願いいたします。
	（再質問） 具体的な政策としておっしゃっていたように、『三田イクボス共同宣言』という素晴らしい政策を実施されていると思います。ただ、実状三田市民のこの政策に対する認知度が低いように思われます。これについて、今後市民の方々により幅広く知っていただくために、どのような PR をしていこうとお考えですか。市の考えをお聞かせください。	（再答弁） 三田市が市の企業と取り組みを進めておりますイクボス宣言をはじめ、いくつかの事業につきましては、多くの方々市民の方々に知られていないという事は、私も気がかりな所であります。これからは、例えば SNS や HP も活用しながら、積極的に広報していくと共に、また、学校教育においてもイクボスの考え方を広く知ってもらうような取り組みを積極的に進めてまいりますので、ご理解のほど宜しくお願い致します。

⑥中村　美月(三田学園)	**【キッピーの知名度について】** 私は、幼少期を丹波篠山市で育ち、その時、丹波篠山市のマスコットキャラクターの「まるいの」が大好きでした。地域のお祭りなどに参加するといつも「まるいの」も参加していて、とてもかわいかった印象があります。 三田市でもマスコットキャラクターとしてキッピー、ハッピー、チャッピーがおり、市民センターまつりなどに参加されていますが、学校の友達などに「キッピー」を知っている人を聞くと3割程度で、その他の人は「キッピーモール」とよく間違えていました。また、家族のハッピーやチャッピーはもはや、存在自体が知られていないのが現状でした。せっかく三田市を代表しているキャラクターがいるのにこの知名度ではいけないのではないかと思いました。 こうした対策として、私が考えたのは次の2つです。1つ目はキャラクター自体の改良（リニューアル）です。くまモンやふなっしーの様に“このキャラクターはこの色”というものを分かりやすくはっきりとさせた方が人の記憶に残ります。キッピーファミリーをシンプルにデザインし、色を統一させてもいいと思います。そうすればアレンジもしやすくなり、様々な所で応用できます。さらにリニューアルしたということを宣伝すればネタにもなります。 2つ目は、幼少期の子どもたちへの働きかけです。私がそうだったように子どもの頃の体験は非常に心に残ると思います。そういった意味でも、幼少期の子どもたちとたくさん触れ合えるように、各保育園や幼稚園等の行事への参加や、地域の祭りへの参加など、子どもたちの目に届きやすくする必要があるのではないかと思います。そうすることでキャラクターとしての認知度アップに加えて、子どもたちのふるさと愛へもつながっていくのではないかと考えます。 このキッピーファミリーをうまく生かして、たくさんの人に知られることになれば、三田市も注目され、来る人も増えて地域全体の活性化にもつながると思います。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	マスコットキャラクターは、一時期「ゆるキャラブーム」が起こるなど、当該地域の魅力発信などのイメージ戦略として多くの自治体が採用しています。 三田市のマスコットキャラクターのキッピーはきじをモチーフに、昭和 60 年に誕生しました。当時、三田の山野でよく見かけられる愛着のある鳥で、どこか気品がある様は、田園文化都市にふさわしいとして採用し、現在2代目デザインのキッピーが活躍しています。誕生当初から数えると30年以上が経過しており、親子2代・3代と長きにわたり、三田市民の皆様に親しまれてきた三田市のマスコットです。 更には幸せな家庭と住みよい地域を目指して、平成5年に制定した家族の日に合わせ、平成23年の「三田市家族の日」にはハッピーと結婚、同じく平成26年の「三田市家族の日」には二人に赤ちゃん・チャッピーが生まれ、こうしてキッピーファミリーが誕生し、本市は全国に先駆けて取り組んでまいりました。そういう意味で、キッピーファミリーはそんな本市の象徴であり、様々なイベントに登場したり、啓発グッズにデザインされるなど、家族みんなで三田のイメージアップと認知度向上に貢献してくれております。 そこで先ず、議員ご提案1点目のキャラクターのリニューアルについてでございます。キッピーファミリーは、きじをモチーフに、カラフルな色合いに仕上げられており、現在、それぞれに商標登録も行い、市の財産として大切に取り扱っておりますこと、更には長く三田市民に親しまれてきたことなども念頭に、整理するべき課題もあり、現時点ではリニューアル化することは難しいと考えております。しかしながら、「キャラクターを際立たせる」といった議員のお考えには共感するところであり、現状のキャラクターデザインの範囲内とはなりますが、活用の際にはより目立たせることを念頭において、見せ方を工夫してまいりたいと考えております。 次にご提案2点目の幼少期の子どもたちへの働きかけでございます。今年は新型コロナウイルス感染症拡大を受け、多くのイベントが中止となった影響で、残念なことにキッピーファミリーの出番も少なくなっているのが現状です。 これまで、市民センターまつりをはじめとした各種イベントや地域の行事などに、キッピーファミリーが応援にかけつけ、催しを盛り上げてくれています。その際、一番歓迎してくれるのは子ども達です。議員ご指摘のとおり、三田で生まれ育つ子どもたちが、キッピーファミリーと触れあうことで、自分たちのまちに愛着を持つことにもつながります。 現在、本市では、親子連れで参加できるイベントへの参加、啓発グッズをはじめ市の刊行物等にデザインを入れるなど、キッピーファミリーを積極的に活用しています。なお、キッピーファミリーのデザインは本市のPR、イメージアップにつながるものであれば、原則誰でも、無料で使用することができます。またキッピーファミリーの貸し出しも行っており、地域、団体のイベント等でも活用することができます。各高校の行事等において活用したり、例えば、各幼稚園や保育所に出向くボランティア活動なども取り入れてみてはいかがでしょうか。市としましても、市行事や各保育園・幼稚園行事での活用を促したり、デザインの活用や貸し出しが可能であることなど、積極的に広報紙などあらゆる媒体を通じて、啓発周知を行ってまいります。 最後にキッピーファミリーは全国でも珍しい三体一組のファミリーキャラクターです。その強みを生かし、キッピーファミリーを通して、家族愛あふれた三田市の魅力発信に引き続き取り組んでまいりますので、その際には議員をはじめ若い皆さんの知恵と力をお借りできればと考えます。是非一緒に取り組んでいきましょう。

令和２年度三田市高校生議会　質問・答弁内容

⑦山崎　真寛（三田西陵）	**【ゴミと環境について】** 　私は釣りが好きで人があまり行かない場所を通ることがあるのですが、その時、目にするのが不法投棄されているゴミです。自分の生まれ育った街である三田市の自然が壊されていくようでとても悲しい思いがあります。 　そこで、コロナ渦で家庭ゴミが増加している現在、市民一人ひとりがゴミの減量化、きれいな街づくりを目指して、行動を起こさなければならないと感じています。現在、三田市では出前講座「三田の環境～わたしたちにできること～」があり、身近なことから環境を考える取り組みが行われています。また、クリーンセンターの施設見学などを通してゴミに対する環境学習を実施するなど、子どもを含めた市民への環境についての学習を推進しています。自分自身も、これまで、環境について学び、自然とゴミに対する意識が高まりました。また、高校でもボランティア清掃をするなど、地域の美化に取り組んでおり、「ゴミをポイ捨てしない、させない」という気持ちがより一層強くなっています。そのように、普段からの取り組みや教育が、きれいな三田市を創っていくと感じています。だからこそ、生涯学習の一環として、幅広い年齢層の方々が、ゴミに対する意識を高めるために、楽しく環境学習ができるワークショップやボランティア清掃などをさらに活性化することが必要だと感じています。また、道路や公園だけでなく、人の目につかないような場所のクリーン作戦なども実施してほしいと考えています。 　これまでも三田市として廃棄物処理について計画、取り組みがされていますが、中でも持続可能な社会を目指した環境学習の取り組みについて、どのような指針で今後継続、発展されていくのか、お伺いしたいです。 　以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	ゴミの不法投棄につきましては、議員ご質問の通り三田市においてもみなさんの生活環境を守るため、重要な課題として取り組んでおります。その取り組みとしては原則毎日市内を巡回する環境パトロールを行い、道路などに捨てられたゴミの清掃やゴミが捨てられやすい場所への不法投棄禁止の看板の設置などを行っております。また市民や団体の方に、不法投棄を未然に防止し、環境美化意識の高揚を図っていただくためにクリーンサポーター制度を設け、登録いただくとともに自宅など周辺の身近な場所を中心に自主的な清掃活動を行っていただくほか、市と一緒になって人の集まる市内各駅前の清掃活動も行っているところです。 　この他、快適な生活環境の維持を目的として、それぞれの地域が主体となって「クリーンデー」として地域内の美化活動に取り組まれており、市ではこの取り組みに対してごみの収集などの支援を行っています。 　しかし、先ほどの写真のように人目のつかない、個人で所有されているいわゆる民地での不法投棄につきましては、土地の管理者である所有者に片づけてもらう事や、それ以上ゴミを捨てられないようにバリケードや看板の設置を依頼しております。 　これまで市では環境基本計画、一般廃棄物処理基本計画を策定し、持続可能な社会の実現に向け、様々な手法によりごみの減量化、再資源化等の促進に努めてまいりました。 　環境学習の取り組みについては、ごみ問題や環境問題をテーマに「出前講座」をはじめ、クリーンセンター施設の見学や食品ロスを減らすためのエコクッキング教室や、魚のつかみ取り体験など様々な環境学習の機会を通じて環境の大切さを理解していただくことで、山崎議員のように一人でも多くの方に三田の自然を守り、きれいな街となるよう取り組みを推進してまいりますのでよろしくお願いいたします。

令和２年度三田市高校生議会　質問・答弁内容

⑧伴仲　武人(北摂三田)	**【LGBTQ+の権利について】** 　最近の国際社会においては、性の多様性が広く認められるようになり、LGBTQ+の当事者が自ら自分の意志を発信しやすくなりました。しかしながら、日本においては、まだまだ理解をされていない現状があります。私の身の周りにおいても露骨に差別的、あるいは否定的な言動を見聞きすることがあります。 　三田市においては、昨年パートナーシップ制度が導入され、数組のペアが認められるなど大変意義あることだと考えていますが、まだまだ世間一般的にはなっていないと考えます。私は、 LGBTQ+のみならず、広く人権を保護する条例が起草状態にあることを知り、ぜひ、正式に条例を策定していただきたいと思います。 　そうした中においても、やはりこの問題の一番の根底にあるのは世間一般の差別や否定意識であり、これが改善されない限り、この問題は根本的な解決に至らないと考えます。 　よって、私は、性の多様性を包括的に理解し認めるためには、小中学生を対象とする LGBTQ+の専門家の講演会など、より積極的な取り組みが必要ではないかと考えました。学校の性教育では必要な情報が十分に得られているとは思えず、個々の生徒が自分の興味のある情報を見る中で、時には不確かな情報を得てしまうという状況も考えられ、そのため、性に対してまだ未熟な年齢から教育をすべきではないかと考えたからです。 　以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	まず、LGBTQ+の方を含め、広く人権を保護する条例を制定してほしいとのご意見についてでございますが、本市では現在、仮称ですが「三田市人と人との共生条例」の制定に向け、様々な分野の専門家や市内の団体等からご意見を頂きながら具体的な内容を検討しているところです。 　この条例では、一人一人がお互いの人権を尊重し、多様性を認め合い、社会的な孤立や排除から守り、人と人とが支え合い共に生きていく、誰もが自分らしく生きられるまちの実現を目標に掲げたいと考えています。 　そして、委員ご指摘のとおり、差別意識や相手を否定し排除しようとする意識が生じないようにすることは、この目標の実現のために大変重要な視点であります。 　このため、様々な機会を通じて行う「教育・啓発」は最も重要な取り組みの一つになると考えておりますので、条例の制定を契機として、より効果的な「教育・啓発」の手法を検討し実行することにより、LGBTQ+の方をはじめ社会的な弱者や少数者といわれる方も、自分らしく生きられるまちにしていきたいと考えています。 　次に、性の多様性を理解し認めるには小中学生を対象に積極的に教育すべきではないかとのご質問にお答えいたします。 　現在、市内においては、昨年4月に作成しました「三田市職員・教職員のための性の多様性への理解促進に向けたハンドブック」などを活用して、小中学校の人権教育担当の教職員を対象に研修会を実施し、LGBTQ+の児童生徒に寄り添える学校づくりを進めています。 　また、当事者である児童生徒に対しては、文部科学省の示す通知に基づき、児童生徒の心情等に配慮しながらきめ細かな対応に努めるとともに、多くの学校では、性の多様性の理解を深めるために、人権講演会等において当事者の方の話を直接聞く機会を設けています。 　性に関する教育については、文部科学省の学習指導要領に基づき保健指導の中で、心と体の発育や発達について指導していますが、心身の発達の状態は児童生徒一人一人異なるため、同じ学習内容であっても感じ方はそれぞれ異なることがあります。 　このため、児童生徒の発達段階に応じて、「生殖機能」や「性情報への対処」などの性に関する知識とともに、他者の痛みや感情を共感できる力を育む教育を行うことが大切だと考えております。 　今後も学校では、自分らしさを大切にし、お互いの違いや性の多様性を認め合うことができる人を育成することができるよう、全ての教育活動を通じて取り組んでまいりますので、ご理解いただきますようお願いします。

⑨森崎　楓菜(有馬)	**【障害者のための町づくりについて】** 以前、外出時に車椅子に乗っている障害者の方と出会いました。付き添いの人と少し離れている間の動きは、何をするにしてもとても大変そうに見えました。その時、私にもっと障害者の方に対する正しい知識があれば何かできたのではないかと思いました。また、現代社会では障害者の方に話しかけることが難しいと感じている人が多いにように思います。友人 25 人に「障害者の方が困っていたら助けようと思うか。また、話しかけることができるか。」と聞いたところ、16 人の友人が、「助けようと思うが、話しかけられない。」と答えました。理由には、「いきなり話しかけると、驚かせてしまうかもしれないと不安に思っているから。」「緊張して本当に話しかけて良いのかわからなくなるから。」「どう話しかければ良いかわからないから。」などの意見がありました。 この対策として、車椅子だけでなく、障害者全般の知識を身に付けると同時に、障害者の方と触れ合い、理解を深める場を設けてはどうだろうかと考えました。例えば、市民センターで障害者の方と障害を持っていない人との談話会を開いたり、卓球やゴルフなどのスポーツを通して互いの理解を深めるイベントを企画することが大切だと考えています。また、それらのイベントをたくさんの人に知ってもらうために、SNS を利用して告知すると、よりたくさんの方に知ってもらえると思います。そうすることで、障害者の方も、助けたいけれどどう話しかければ良いのか分からない人も、互いに理解が深まり、あたたかい町への第一歩になると思ったからです。これからも、あたたかく住みやすい三田市であるために必要な取り組みの一つだと思います。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	三田市では、平成 30 年7月に「三田市障害を理由とする差別をなくし、すべての人が共に生きるまち条例」を制定し、障害のある人もない人も自分らしく、自立と社会参加ができる共生のまちの実現を目指しています。 また昨年 11 月には、共生社会を推進するためのプログラムを作成し、障害のある人とともに市民誰もが「共に生き、互いを尊重し、応援し合える社会」づくりを進めているところです。 議員ご指摘の、障害のある人への声かけが難しいとのご意見についてですが、周りの人が声かけをしたりするには、障害のある人が持っている特性や困りごとなどが想像できて、無理なく自然に声かけしたり、話したりできるようになればいいと思います。そのためには、障害についての基礎的な知識や、障害のある人に対する理解を深め、障害のある人の状況に応じた接し方、コミュニケーションのとり方を身につけることが大事ですが、なかなか容易にできないこともあります。障害のある人の困りごとなどに気づき、無理なく行動できて、すべての人がお互いにわかり合えるよう、理解促進の取組みが必要だと考えています。 また、障害をお持ちの方などで、何かあるときに助けてもらいたいという意思表示を周囲の人たちに伝える手段の一つに、ヘルプマーク(ヘルプカード)というものがあります。それを携帯する方も中にはおられますので、ヘルプカードを持っておられる方を見かけたら、何か困っておられる様子の時には、「どうされましたか」「何かお手伝いしましょうか」など、声かけができやすくなります。こうしたものがあることも知っておいていただきたいと思います。 議員ご提案の障害者全般の知識を身に付けることや障害のある人と触れ合い理解を深める場を設けることについてですが、障害のある人もない人も気軽に集り、話ができる場があったり、障害のあるなしにかかわらず、ともにスポーツ活動ができる機会を多くつくることは、とても大切なことです。今年は新型コロナウイルス感染症の拡大による影響で実施できておりませんが、例年市においても、子どもから高齢者まで誰もが参加できる三田ファミリースポーツカーニバル＆市民チャレンジデーの開催、車いすの方も参加できるファンランの部を設けた三田国際マスターズマラソン大会などを実施しています。ほかにも毎年 12 月には、障害者週間のイベントにおいて障害者スポーツの紹介や体験会を実施するなど、スポーツを通して広く障害のある人との触れ合う場づくりに取り組んでいます。 これからも市が関係するスポーツやイベント等について、障害のある人が参加でき、触れ合える場となるよう、多くの市民に知っていただけるように周知してまいります。議員も積極的に参加いただき、すべての人が共に生き、互いに尊重し、応援し合える共生社会を共につくっていきましょう。どうぞよろしくお願いいたします。

⑩小澤　維挙（三田祥雲館）	**【小・中学校における主権者教育の拡充について】** 私は、学校の探究活動を通して、女性の政界進出について研究しています。その研究の一環で、女性の政界進出の促進を達成するための手段として、教育による若者の政治に対する意識の啓発を考えました。わが国では2016 年に選挙権が 18 歳に引き下げられ、高校生でも 18 歳であれば投票することが可能になりました。しかし、依然として若者の政治に対する意識は高いとは言えず、2020 年 10 月に行われた三田市議会議員選挙においては、18 歳の投票率は 47.91％、19 歳の投票率は 34.51％、10 代全体の投票率は 40.97％と、半数を切っています。友人との会話の中でも、政治・行政についての意識があまりないのではないかと感じられることもあります。 そこで私は、「『若者』に対する主権者教育および啓発活動」という大きな観点から、特に小・中学校における主権者教育に絞って考え、幼いうちから政治を身近に、そして体験的に捉えることのできるような教育活動を行うべきであると考えました。 そこで、市の出前授業などで実施できる活動のひとつとして、「生徒・児童が自ら考える授業」を提案します。例えば、実際の市議会議員選挙で争点となった公約等をいくつか提示し、どれを選択すればよいかを生徒・児童それぞれが情報を収集し、考え、討論を行うというものです。これは、単に政治のしくみや制度を学ぶだけに終わるのでなく、居住している三田市における社会課題について「考える」ことで、政治・行政に対し、「自らが関わるものである」、ということを体験的に認識できると考えます。また、小・中学生にとって身近である「三田市」を取り上げることで、市政への関心ならびに将来的な投票率の上昇にもつながると考えられます。この方法では、実際の公約等を取り扱うことで選挙の公平性が懸念されますが、これはその公約などを掲げた立候補者の名前を伏せることによって防ぐことができると考えます。 このように、実例を用いて「考える」授業を行うことが主体的な主権者を育てる上で必要であると考えます。 以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	さて、平成 27 年 6 月に公職選挙法等の一部を改正する法律が成立し、選挙権年齢は 18 歳に引き下げられ 5 年が経ちましたが、議員ご指摘の通り、該当年齢の若者の政治への関心はまだ決して高まってきているとは言えない状況であると捉えております。 こうした状況に対して、私は、小・中学校を含め、高校 3 年生までに、政治の仕組みについて必要な知識を習得し、主権者として社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を身に着けることが必要であると考えております。この考えは、議員と同様であります。このような力は、今年度から小学校で、来年度から中学校で全面実施となる新しい学習指導要領にも明確に位置づけられており、小学校から、発達段階に応じて体系的に身に付けることができるよう、学習を進めているところです。 新学習指導要領では、特に社会科を中心として、小学校では公共施設の働き、地域の安全を守る働き、健康や生活環境を守る事業、自然災害から人々を守る活動、国民生活における政治の働きといったことから、中学校では歴史的分野で民主政治の来歴、公民分野で民主政治の推進と公正な世論の形成や国民参加との関連等の観点から、主権者教育を充実することとされております。また、皆さんも小中学校で経験されたと思いますが、児童会や生徒会活動、学級活動などの特別活動において、身近な生活の中から課題を見つけ、話し合いによって解決する活動に取り組んでいますが、このような主権者意識を高める取り組みのさらなる充実が求められているところです。 議員ご提案の「生徒・児童が自ら考える授業」「公約の教材化」についてですが、現在小中学校では、各教科等の授業において、自ら考え対話を通して問題の解決を図っていく「主体的・対話的で深い学び」を進める学習の中で実践的に取り組んでおります。このことは、議員ご提案の「生徒・児童が自ら考える授業」に通じるものであり、主権者教育の視点で、問題解決的な学習を行うことにより、よりよい社会を考え、主体的に問題解決しようとする態度を養っていくことにつながるものと考えます。また、「公約の教材化」につきましては、「公約」は地域の課題や市民の願いを反映する側面もあり、教材開発をする際の題材の一つとして取り上げることで、問題解決的な学習を通して、市政に関心を持ち、当事者としての自覚を持って課題の解決に向かおうとする態度の育成につながるものとして、大変有意義なものであり、参考とさせていただきたいと思います。 市教育委員会としましては、今後も、小学校から発達段階に応じた主権者教育の充実を図ることで、ふるさと三田の政治に関心を持ち、社会を構成する一市民として主体的に他者と協働し、将来にわたってよりよいまちづくりに参画していこうとする人物の育成に力を尽くしてまいります。

	（再質問） 　答弁頂いた中で、実践的に教育を始められているということで、その形の教育をいつから行われているのかということと、各教科と同じようにされているということでしたので、もしかすると政治に絞った分野でもない所でされているのではないかと思ったのですが、現在行われている形でその効果が見られる場面はありましたでしょうか。 　市の考えをお聞かせください。	（再答弁） 　主権者教育的な授業についてはいつからという事ですが、先ほどの答弁でも申しあげましが、小学校では今年から始まっています新学習指導要領の中に明確に位置付けられている所ではございますが、選挙権年齢の引き下げがかつてからあったということで、それぞれの授業の中で対話的なことで、自分の意見を出し合いながらまとめていく、対話の中で一つの結論を求めていくということを取り組んでいます。これは、以前からもやっていることでございます。 　そして、どんな教科の中でとのことですが、社会科を中心に、主権者教育を進めているところでございますけども、主権者教育的な考え方を、生徒会の活動であったり、また特別活動といった学級会の活動であったり、自分たちの活動をより良くするためにはどうしたらよいかということを、それぞれ話し合いながらひとつの結論を出していくといった取り組みを重ねる中で、それがひいては、学校づくりであったり、地域づくりであったり、そのことが市の政治であったり、また国の政治にまで発展しないかな、ということで取り組んでいます。それが、特別活動であったり、社会科であったり、色んな教科の中での活動が、全て主権者教育に繋がっていくのではないかと思っています。こういったことを更に、充実して取り組んでまいりたいと思っております。

⑪榊原　優斗(三田学園)	**【変わりゆくまちと交通について】** 　私が住んでいる地域の隣の地域は、区画整理の対象となっており、子どもの頃から見慣れた風景が、日を追うごとに変わっていくのを見ながら、過ごしてきました。そして、今でも、幼い頃に見た三田の風景を強く覚えています。 　こちらの写真を見てください。現在のキッピーモールの裏側には、マンションが建っています。しかし、昔の場所には、商業施設や商店街がありました。新しく街が生まれ変わることはとてもいいことだと思いますが、見慣れた風景が、この三田の街がどのように変わっていくのかが気になりました。 　三田駅や新三田駅周辺で区画整理が進んでいるのは知っていますが、それ以外の鉄道路線の通っていない地域の計画はどうなっているのでしょうか。また、公共交通機関のない地域こそ、行政主導により環境整備が必要ではないでしょうか。今後、さらに高齢化が進み、運転免許の返納者が増えると、その地域住民は買い物や病院にも行けなくなります。三田市では、自動運転バスやおでかけサポート事業の実証実験など様々な取り組みをされ、「スマートシティ」を目指されていますが、いわゆる過疎地域の交通事業は今後、どのように計画されているのでしょうか。 　まちが発展していくためには交通は不可欠です。どこの地域に住んでいても、等しく高い水準の交通の便を得られ、かつ緑豊かな街三田を残すことができれば、よりより生活環境を求めて子育て世代の移住につながると思います。利便性も豊かな自然もある、そんな三田になればいいなと思います。 　以上のことにつきまして、市の考えをお聞かせください。	高齢者を含む交通弱者の移動手段の確保は、地域社会を取り巻く交通の大きな課題と認識しています。また、高齢化の進展に伴い運転免許を返納される方も増えており、車を気軽に利用できない人でも安心して住み続けられるよう、公共交通の役割はこれまで以上に大きくなってまいります。 　このような社会的な背景を踏まえ、市では、平成31年3月に三田市の公共交通の将来像を示す「三田市地域公共交通網形成計画」を策定しました。 　計画では、「人がつながるみんなで育てる明日の公共交通」を基本理念に掲げ、市民、交通事業者、行政が互いに役割分担しながら持続可能な地域公共交通ネットワークの形成を目指すこととしています。 　実現にあたりましては、特に農村地域における新たな移動手段の確保が急務であり、既存の公共交通と連携しながら地域に根ざす新たな地域内交通の導入に向け地域の皆様とともに検討を進めているところでございます。 　これまで、市が令和元年度に創設いたしました「みんなで育てる地域内交通検討支援プログラム」により、共に検討を重ねてきた広野地区では、地域の助け合い活動や地域コミュニティを生かしながら、地域課題やニーズに柔軟に対応できる自家用有償旅客運送を新たに地域内交通として活用するため、試験運行を1月19日より3月19日までの約2か月間行い、この夏頃の本格運行を目指しています。 　また、広野地区においては、「さんだ里山スマートシティ」のリーディングプロジェクトの一つでもあるオンデマンドシステムも活用しながら、運用面、利用面ともにサービス向上が図られるよう試行していくこととしています。 　このように、本市の交通については、新たな手段と新たな技術の活用により大きな転換期を迎えようとしております。 　今後は、既存の公共交通を軸とし、地域住民が主体となり地域の実情に応じた地域内交通の導入を積極的に進め、市内どこの地域に住んでいても等しく高い水準の交通の便が得られるよう取り組んでまいりますので、ご理解いただきますようお願いいたします。
	（再質問） 　交通計画に関して、なお一層の拡充をお願い致します。 　私から追加で、変わりゆく街の部分について質問をさせていただきます。昨年 12 月、現在キッピーモール 2 階に入っている三田阪急が撤退するというニュースが報道されました。キッピーモール 2 階の三田阪急は、キッピーモールの核テナントだったという事もあり、相当大きな打撃になると思います。現在三田市では、緑豊かな街三田という大きなブランドがある中、更に追加で阪急百貨店という大手百貨店が出店しているそういう街であるというブランドもあった中、阪急百貨店の撤退というのは、そのブランドを失ってしまうことになってしまいます。そして、撤退した後、テナントが入らないままだと、そこ部分が空いてしまい、その後にも大きな打撃があると思います。そこで、阪急百貨店が撤退した後のテナントは、現在どのようなテナントの募集を考え	（再答弁） 　年末の阪急撤退は、コロナ渦の影響があったとはいえ、致し方ない面もあるのですが、三田駅前のメインのテナントが出て行ってしまうというのは、大変寂しく思いますし、残念な気持ちです。市民の皆さんも、これから三田の街がどうなっていくのだろうと漠然とした不安を感じている方も多いのではないかと思っています。現在、キッピーモールを運営している三田地域振興株式会社が中心となって新しい次のテナントの誘致を精力的に進めてもらっている所です。先ほど言われたように、色々特色のある店舗、三田の顔となるようなブランド力のあるような店舗にきていただければいいのですが、具体的な店舗につきましては、今現在、精力的にリーシングを進めている所でして、市としても三田地域振興を全面的にバックアップして、次の店舗が早く見つかるように努めている所であります。 　そして次に関連して、駅前でキッピーモール東隣の区画 C ブロックで、30 年来続けてきた駅前再開発の総仕上げとなるような再開発事業が進められています。三田市としては、この C ブロック地区につきましては、令和 7 年度の完成に向けて、準備組合が色んな計画を作り、今年度に組合ができ、事

	ているのでしょうか。今の阪急百貨店のように色々なショップが入り、かつ各地域の特産品も手に入るようなショップになるのか、それともまた、別の形のテナントを誘致するのか、そこの誘致の部分がどうなっているのか、またそのような中で現在開発が進んでいる C ブロックの開発はどのように進んでいくのでしょうか。 　市の考えをお聞かせください。	業計画が発表される手はずになっていますが、7 年度に向けまして駅前のエリア一体において、人々が集まって多様な活動を繰り広げることができる賑わいと活力のある街づくりを進めていきたいと思っております。具体的に言えば、キッピースクエアから繋がる賑わい広場や幅 30m のシンボルロードを整備したり、武庫川の水辺空間などで、居心地がよくて歩きたくなるような空間を再整備するというものであります。この計画につきましては、公表している訳ですが、こうしたことが、次のテナント誘致、あるいは C ブロック事業への大きな後押し、後方支援になればと考えていますし、市民の皆様にも明るい希望、期待を抱いていただきたいと思っている所です。これからの三田のまちの更なる活性化、魅力あるまちづくりについて、市としても最大限頑張っていきますので、よろしくお願いいたします。